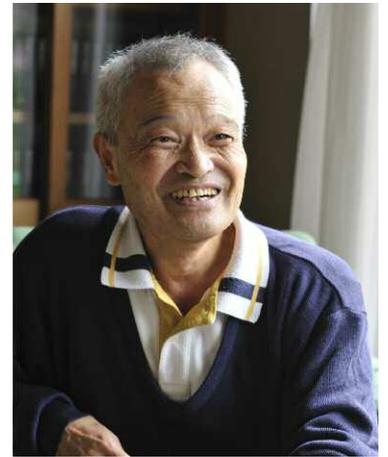


家の祭り〈アエノコト〉 田の神祭りに見る 日本人の 神意識

「近ごろの若者は」と言われるように、
信心する気持ちが薄くなったのは
最近の傾向と思っていましたが、
森田悌さんの古代の人の神意識をうかがうと、
不信心なのは何も
ここに始まったことではないようです。
水も土地も豊かで、超越神の存在がなくても
生きていかれた日本人が、
目に見える物に〈神霊〉が宿ると考えたことは、
アジアでも珍しく、
独自の神意識だったようです。



取材にご協力いただいた田中牛雄さん。石川県珠洲市でアエノコトの祭りを継承し続けている。田の神様にお供えするご馳走や食器は、各家でさまざま。そこに「家の祭り」らしいおらかさを感じられる。神様からのお下がりも、家族にとっても減多にないご馳走で楽しみに待たれたことだろう。写真では、箸がお膳に置かれていることから田の神様が食事をとっておられることがわかる。



森田 悌

もりた てい

群馬大学名誉教授

1941年埼玉県生まれ。東京大学文学部国史学科、同法学部公法課程卒業。1971年金沢大学助教授、教授を経て、1995年群馬大学教育学部教授。2008年定年退任、名誉教授。上代から平安朝を研究著述し、『日本後紀』、『続日本後紀』を初めて現代語訳した。日本古代史専攻。主な著書に『推古朝と聖徳太子』（岩田書院 2005）、『天智天皇と大化改新』（同成社 2009）、『続日本後紀 上下巻』（講談社学術文庫 2010）ほか

唯物的な古代の神意識

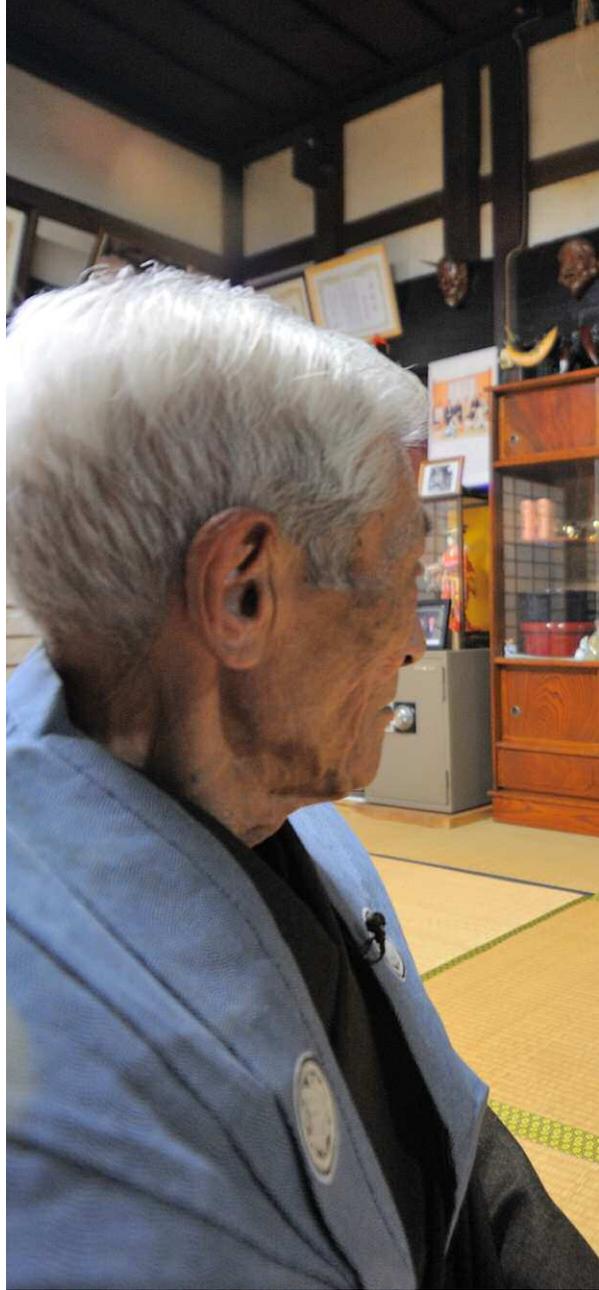
僕は古代史が専門です。古代社会を見てみますと、どうしてもその後の展開とは疎遠になります。しかし、逆に考えてみると、日本の原型を見るには都合がいい。

当然のことながら、非常に古い段階での日本の在り方と、今とでは大きな隔たりがあります。例えば、日本の神霊というかスピリットは、常に物とくっついていて、物と離れて意識されることはいないですね。アエノコトでいうと、穀霊は穀物そのものでして、それを祀る。穀物の移動に伴って、神霊も移動してくるのです。したがって、日本の古代には超越神たる第三者の存在なんていう意識はなかったと思います。超越神といった発想は、多分にキリス

ト教などの唯一神宗教に出てくるものです。日本の場合は、物から離れた〈神〉というような存在を生み出す段階にまで至らなかったんですね。物自体に神霊がある、と見る。その神霊を祀るのが日本の祭礼なのです。

祀るっていうのは奉るで、物を差し上げることですよね。差し上げてうまくいったら報賽、お礼をするわけです。それが祭りです。極端なことを言いますと、目に見えないとか、感じられない、触れられない〈物〉については認識がなかった、と言いついてしまっても構わないくらいです。「ちょっと、それは言い過ぎじゃないか」という人がいるかもしれないけど、僕はこのことに、かなり確信を持っているんですよ。

他界とか異界とかいう言葉を使ったりすることがありますが、日



本の古い段階では、他界観なんてありません。はっきり言って、古代人は死者の世界を想定していません。目の前にある今だけです。見える物、あるいは触れる物、あとは音に聞こえる物とか、こういう物だけしか認識しない。その中に神霊がある、と考えているんです。

役に立つとか、お願いする段になって然るべき祭祀をした。祭祀は、構造的には、そういう具合に考えればよいと思います。

日本では天を祀らない

僕は論文や著書で、外から来る神霊に触れ、稲を育てる神霊、空から降りてくる神霊などについて書いていますが、これは、かなり新しい神意識だと思います。新し

いとこういうものの、みなさんの常識からいったら、まあ古い段階ということになるかもしれません。強いていえば、稲作を始めた前後のころには、まだ、そのような神意識はなかったと思います。

『三国志』魏書東夷伝（この中に有名な魏志倭人伝が含まれている）を読んでいますと、中国の東方の諸国、満州から朝鮮、日本についての信仰形態について触れている部分があります。

そこには、朝鮮半島の中央部の南の辺りまでは、全部ね、祭天の習俗があるというんです。しかし、朝鮮半島の一番南の弁韓、のちの任那ですが、弁韓と倭国については書いてないんですよ。他には全部書いてあって、書いてないことは、なかったことにはならないんだって言われたら、そりゃちょっと困りますけれど、やはり他の国について書いてあって、弁韓と倭国についてだけ書いてなかったとしたら、やはりなかったということになります。これは、日本では天を祀るという習俗はなかった、という証明になると思っています。

邪馬台国の卑弥呼は天を祀ってはいないんです。天はあまりに遠くつかみどころのないものですから、どうのこうのといった発想はなかったでしょう。だから、日本で天を祀るっていうのは、僕の

考えていうと、弥生時代が終わった段階以降ということになります。中国だと超越的なものとして天があるのですが、日本は中国のすぐ隣に位置しているのに、時代が下らないと、取り入れなかったのです。だから、日本の歴史の全体を考えたら、高天原なんていうのはかなり新しいはずですよ。高天原は、よく北方から入ってきた觀念、信仰だといわれますが、僕もそのとおりだと思います。日本の基層文化は照葉樹林文化だといいますが、北方の文化が入ってくる以前の段階では、天を感じることはなかったのではないのでしょうか。関連して、星座のこともあまり知らないし、関心が稀薄ですよ。

ついでに、沖繩のニライカナイは海からだといえますけれど、それを日本の文化の本質にかかわると考えたなら、かなり問題です。折口信夫なんかを読んでいると、よく出てくるんですけど、僕の理解の範囲を越えていますね。ニライカナイのような觀念は、もともと南の南洋というか、島嶼部へ行ったら、ああいう世界観もあるのでしょう。ですから日本の伝統的な文化を議論するときに、沖繩の話を入れると、混乱して、わかりにくくなってしまふと思いますよ。

中国人にとっては、人間世界とは別な所（他界）として天がある。そして死者の行く黄泉がある。しかし日本では天について格別の意識がなければ、黄泉が存在するという発想もなかったということですよ。

先祖もせいぜい祖父父母まで

黄泉に触れたところで、それは、日本人は死んだらどうなるのだということですけど、死んだ直後は悲しんだり、霊がそこいらをさまよっているのではないかと考えていたと思いますが、しばらくすると忘れてしまつて、それで終わりです。存在が感じられなくなりますから。

我々日本人は、世界でも珍しい親不孝、祖先不孝な民族で、親が死んで何年かすると法事も「もう、終わりにします」ってなるでしょう？ 何回忌かまですると、お仕舞いになる。文明民族の世界でこういうのは、あまりないと思えます。少なくとも東アジアの中国、朝鮮では、そんなことをやったら大変なことになります。

僕は学生によく、「君たちね、自分のおじいさん、おばあさん四人の名前を言えるかい」と聞いたことがあります。答えられない学生が多い。これでは、ご先祖様を大事にしているとは言えませんよ。



写真、上から／神棚には、めでたい文字や模様が細工された切り紙が下げられていた。／田の神様をお迎えする準備として火を熾す。／田中家では田んぼには行かず、家の中で神様をお迎える。／火打石で火花を起こすことを切火（きりび）を切るともいうが、火が魔除けになるというお祓いとしての意味があるようだ／神様が食事をされる前には、箸は俵の上に置かれる。



最近薄れてきたように言われるけれど、中国や韓国に比べたら日本人の祖先観というのは、もとから罰当たりな感じですか。それは近年宗教的な意識が薄れてきたからでなくて、本来そういうものだったのです。日本人が祖先崇拜しているなんていうと、韓国の人には笑われるでしょうね。彼らは千年くらい前の家系図を持っていますから。そして、先祖の名前を憶える術を心得ているのですね。

欽明朝に仏教が入り、推古朝以降それが盛んに信仰されるようになります、儒教も入ってきて、知識人の世界でそれらが浸透した段階で、祖先とか死後の世界に意識が向くようになりました。しかし、庶民のレベルでは普及しない。これは一貫して今日まで続いている傾向

と言つて過言ではありません。みなさんの常識になつていいるかどうか知りませんが、古墳時代に、古墳に人を葬つた後、死後のお祀りはどれくらい続けて行なわれているか知っていますか？せいぜい一、二回ですよ。棺を置く部分が竪穴式の場合は、遺体を一回しか埋められないけれど、横穴式になると何回も遺体を入れられます。その場合は新しく入れた段階で、またお祀りしますが、前の人のことは、もう忘れちゃいます。古い時代の天皇陵が眉ツバものだということは、しばしば言われていますが、そう言われるのは死者の祭りが継続して行なわれていなかったことによります。

物と神霊が結びついて、目に見えるものにしてはじめて神霊、スプリットと関係する、というのは、現今の日本文化にも濃厚にあると思います。いなくなつたら、存在しなくなつたら、終わりなんです。こういうことは、まさに伝統を引き継いでいると思いますね。

仏教は他界観をきちんと持つていて、日本の仏教者の中には、西方浄土へ行こうと本心に歩き出した人もいます。しかしこれは中世に見られた現象で、日本の宗教観において中世は特殊な時代で、近世以降には引き継がれなかった。私たちの世界では、外から入ってきた仏教文化や中国文化に影響されて、本来のものが消えたり、変容しているのは事実ですが、しかしその一方で核心的なところで残っている部分があります。神道関係の人たちは、何かにつけ「森

アエノコトと嘗の祭り

羅万象に神霊が宿っている、大切にしないで」と言いますよね。この発想なんかはまさにそうで、非常に古い段階の日本の在り方を引き継いでいると思います。

古代史というのは残っている文献・文字資料は少ないけれど、解明に当たっては、残っているものを使うのが本来だし、それが僕ら古代史研究者の仕事です。ただ、それだけだと限界があるので、少ない史料をつなぐ部分を、何か別のところや視点に立って追究してみようと。それでやったのが、僕の場合はこの本（『田の神まつり』の歴史と民俗 吉川弘文館1996）なのです。

古代史の文献を読んでいて関心を持ったことの一つに、祭礼のことがあります。朝廷で行なわれる重要な祭礼行事に、嘗の祭りと呼ばれる三つの神事があります。11月の新嘗（もしくはへんじょう）祭りと6月と12月の月次祭です。大嘗祭は天代初の新嘗祭のことです。嘗の祭りは、神今食ともいい、天皇が夜、神を迎えて御膳を進め、自らも食する神事で、真夜中を挟んで二度繰り返します。この二度の御膳を悠紀、主基の膳といいますが。この行事、神態ですが、真に面白く、興味の赴くままに僕は、文献でかなり勉強したわけです。僕は大学では井上光貞先生という方に教わりましたが、先生も神祇令（じんぎりょう）に関心があつてね。岩波書店から出ている日本思想大系の



『律令』の神祇令の部分は、井上先生ご自身が書かれています。

井上光貞

(いのうえみつただ 1917~1989年)
日本の歴史学者。東京大学名誉教授。国立歴史民俗博物館初代館長。専門は日本古代史。共編書の『日本の歴史』（中央公論社1973）シリーズは、ロングセラーを更新している。

僕も井上先生に教わりながら、祭礼に関心を持つようになって、それなりに知識を深めていったのです。その後、大学院が終わって1971年（昭和46）にまず金沢大学へ赴任し、そこで初めてアエノコトなるものを知りました。

それを見て、驚いちゃいましたね。向こうでは12月に入るとTVでもやるんですよ。これは面白いなあと思ひ、図書館などに行き、あちこちにある映像の資料を見せ

てもらって、「なるほど、なるほど」と一つひとつ感心しました。当時はまだ能登では、多くの家庭でアエノコトをやっていました。

家庭の中のお祭りなのでなかなか目に触れないけれど、現段階でも、かなり、まだやっていると思いますよ。ユネスコに登録されています。ちょっと脚光を浴びて、取材陣も来たようです。もともと、だいぶ観光化してしまったりところもあるようです。福井にも同性格の祭りが有り、そこではアイノコトと言うことが多いですね。相木（あいのき）という地名が、日本全国にかなりありますが、アイノコトにかかわる地名だとする説があります。

僕が驚嘆したのは、能登のアエノコトを見て、神祇令から知られる嘗の祭りの在り方が、非常によ

くわかったからなのです。

アエノコトのときにお供えするのは、魚菜からなる食べものです。二股大根と人参が並べられるのは男女を象徴し、豊穰にかかわることはいうまでもありません。そして核心的な祭礼内容として、迎えられるのが男神、女神の二神であることです。僕は、この男女二神が迎えられ、接待されることにもすごく興味をそそられたのです。

荒唐無稽な解釈も

ところで嘗の祭りについては、奇妙な解釈が行なわれてきています。朝廷で行なわれる嘗の祭りでは、天皇が神態を行なう神殿内にマトコオフスマと称する寝具を敷

き並べ寝所を設けるのですが、例えば折口などは、天皇がそこに入り込んで生命力を強くするのだ、という解釈をしています。また歴史学者の中には、天皇は一人で入るのではなくて、皇后というか、采女（うねめ）というか、つまり女性と一緒に入るといふ人もいます。歴史学のほうでは聖婚という言葉を使いますが、模範的な交接待行をするのだといいます。僕の先生であった井上先生なども、天皇がマトコオフスマにくるまる秘儀があったと理解されていました。これは異様と言えは異様な説でして、僕には非常識、そしておかしい解釈だ、という思いを禁じ得ませんでしたね。

しかし、アエノコトと比較してみると、宮中の祭りでも田の神を

呼んできて接待していることがわかったのです。この視点は、すでに柳田國男が出ていまして、僕も『天皇の祭り 村の祭り』（新人物往来社1994）の中で書きました

が、柳田は「祭儀の中心をなすものは、（遠来の）神と君と、同時に御食事をなされる寧ろ単純素朴」な行事だと書いています。その遠来の神に当たるものとして田の神を迎えており、天皇が迎えるのも田の神である、という解釈をすると、非常にわかりやすくなります。こうして僕は、不思議に思っていたことが一挙に氷解したと感じたのです。

アエノコトでは、田の神様を家へ招き入れると、まずお風呂に入ってもらいます。天皇の神態でも同様に浴場が関係していて、嘗の



写真、上右から。神様に息がかからないように扇子を掲げ持って、食事を済ませた神様を、座敷から風呂場へと誘う様子。／風呂から上がった神様を、再び座敷に案内する田中さん。／袴と現代的なニットバスのミスマッチが、いっそうリアルな臨場感を生み出している。／神様は、座敷に戻って囲炉裏端の座布団でお休みになる。深く頭を垂れてお辞儀（じぎ）する姿からは、形だけではなく、心から神を敬う心持ちがうかがわれる。／神様が座敷にもどられたら、わざと煙が立つように火を焚く。燃料を惜しまず歓待していること象徴でもある。



アエノコトが残る奥能登の地域と旧・町名

国土地理院基盤地図情報（縮尺レベル25000）「石川、富山」及び、国土交通省国土数値情報「河川データ（平成19年）、道路データ（平成7年）、鉄道データ（平成20年）」より編集部で作図



祭りを執行する神殿に入る前に必ず湯浴みをします。もつとも嘗の祭りでは、古代の段階で湯槽の中に入るなんていうことはありませんから、天皇が羽衣という湯帷子を着て沐浴します。お湯掛けの儀式だと思えます。

神殿の中に置かれたマトコオフスマも、単に「お迎えした田の神に寝んでもらう場」と考えると非常にわかりやすいですね。実際、アエノコトでも家の中の稲俵の中で寝てもらいます。

アエノコトの場合には、主人が小さい子供の場合であっても、その子がやる。おばあちゃんに抱かれてとかね。天皇家も同様です。平安時代には幼い天皇もいますから、夜中にやるのでむずかるん

すよ。それでも摂政関白が抱いてあやしなから、天皇がやるんです。むずかる子供のそばに寝台があるのに抱いて寝かせないのです。この事実が、折口の「マトコオフスマにくるまる」という説が成り立たない根拠になります。

しかも、嘗の祭りでは二度同じことをやります。夜中に二度接待の場を設けて、寝台まで改めて、神をお迎えします。研究者の解釈では天照大神、つまり皇祖をお迎えするというものになっていて、天照大神一人をお迎えして、間を置かず続けて二度接待するというのはおかしい。

ここは単に、招じ入れた神様に食事を供してあとは寝んでもらう。そして、神様は男女二柱いらっし

やると考えれば、非常にわかりやすい。アエノコトがまさにその通りですね。男神・女神の穀霊神を迎えて接待するのですから。ただ宮中では、男女二神を別々に接待するわけです。『日本書紀』の中にも、天照大神自身が新嘗の祭りをやっている、とちゃんと書いてあります。ですから、天照大神が祀られているのではないことが、明白です。

この前の今上天皇の大嘗祭は、海部俊樹さんが総理大臣のときでした。当時、内閣告示を出しているのですよ。面白いから丁寧に読んだのですが、その中で「皇祖天照大神をお迎えするのだ」と書いてあって、僕はね、あれは間違っていると思いましたね。

このように、朝廷の嘗の祭りについて、いろいろ不正確な解釈がされてきているんですが、誤りを正し本質をはっきりさせることは、やはり重要ですよ。この点で、能登のアエノコトは僕に大変な示唆を与えてくれました。

朝廷の祭りももとは天皇家の家の祭り

結局、古代律令国家の建設に向かって大きく歩を進めた天武天皇が即位した段階で、国家意識が急激に発達するのです。お祭りも国家祭祀ということになり、変わりました。大まかにいえば、朝廷、あるいは今の皇室のお祭りとしては、そこで変えられたものが、現

段階までできているということです。古代には祭事は女の人人がやっていた時代があって、段々男の人に代わっていく。これは政治社会で、男性の力が強くなったからでしょう。

天武天皇以前の段階、大化の改新の段階などを見ていると、嘗の祭りを天皇家の祭りとしてやっているのです。天皇家が嘗のお祭りをするときには、大臣や皇子たちは自分の家の嘗の祭りを、ちゃんとやっているのです。当今の天皇の執行する祭りでは、皆さん、列席することになっていますから。嘗の祭りについては、天武天皇ががらっと変えたのです。僕はそう思います。

なお、祈年祭は歳神の祭り、つ



まり農作関係の祭り、2月4日に行なわれます。これは規模が大きいけれど、天皇自身は特別な神態をするわけではありません。中国のお祭りを持ってきたものです。

新嘗祭と月次祭の場合では、親修、つまり天皇ご自身がお祭りをしますから、重要な祭りというところで後々まで存続しています。月次祭は江戸時代に廃絶してしまいましたが、新嘗祭は昭和天皇も、今の天皇もちゃんとやっています。

毎年ニュースになる天皇の田植え行事は、昭和天皇から始まるらしいですよ。六国史などを見ますと、天皇が田植えをしている農民を近くで眺めるといふ記述はありますが、自分が田植えをするという事はありません。天皇の田植

えは国民との一体感をつくらうという、政治的な発想に始まるのでしよう。

六国史
奈良時代から平安時代前期にかけて、国家事業として編纂された六つの史書。
『日本書紀』『続日本紀』『日本後紀』『続日本後紀』『日本文徳天皇実録』『日本三代実録』の六つで、一般に国史とされる。

祭りの猥雑さ

万葉集には民間の新嘗祭に関係して、二つほど和歌が残っていて、それに当たりますと、嘗の祭りは女主人がやっています。家刀自いせのこ（家事を掌る女性のこと、主婦）がやります。夫を含めて家の者を全部追い出し、家内を神聖な空間にして、家刀自が穀霊である神様

を迎える。男衆を追い出しているので、言い寄る人が出てくるんです。男女の問題が起きたりしてね。それで恋が生まれて、万葉集で詠っちゃってる。

日本の祭りの一つの特性ですが、神聖性という要素とともに、多く猥雑性を伴っています。男女の出逢いの場だったりしますが、ケースによっては、もう、めちゃくちゃというか。口にするのがはばかられるようなことも起こっています。神様を迎えるの宴、神宴をやっていると、他人が多数上がり込んで来て、乱雑、猥雑になるので、禁令を布告するなんてことが行なわれたこともあります。

民間では古代の段階ですと、月次祭に当たる祭りのことを宅神祭たくしんさい

ヤケの祭りといえます。12月の月次祭は冬の内ですが、春の耕作開始の前にした予祝の祭り、そして6月の月次祭は、稲が花を咲かせる穂孕み期ほほらという大切な時期に、

稲の生長がうまくいくようにとお祭りするわけです。これは東南アジア、タイ辺りの稲の祭り、かなり近似性があるようです。

日本の農村社会の例では、夫婦が夜、田の縁に出かけて行って、セックスを稲に教えるというのがありました。性行為により、うまく結実するよう感染させるわけですね。あるいは嫁入りになぞらえる。タイなどでは、穂孕み期になると、田んぼの周辺に嫁入り道具を並べるようなことをしますね。神聖な婚儀に相応しくなるよう静かにし

なければいけない、というタブーがあつたりします。

出稼ぎをするエビス大黒

たまたま能登に残っているアエノコトも、原型を保っているというより、かなり改変されていると思います。田の神を迎える主人は袴かましもを着ていて、服装などから見ると室町時代ですから、元々の原型である、万葉集などに出てくるものとは、かなり相違することが確かです。

北陸の場合、中世になると、真宗が入りました。真宗は、キリスト教みたいな一神教的要素が強く、他の信仰を迫害して潰しています。たまたま能登は辺境で、そのため

アエノコトが残ったということですが、先に福井のアイノコトに触れましたが、福井県や富山湾を挟んで能登の対岸である富山県・黒部などには、祭りがかなりバリエーションとして残っているようです。黒部にはエビス祭りという特異な祭りがあります。11月20日にエビス神を家に迎え入れ、お風呂に入れ、ご馳走して寝んでいただく。1月20日には外へ出て行っていただくという、形態はアエノコトとまったく同じですが、ここでは迎えられるのが田の神じゃなくて、出稼ぎの神なんです。

多分、アエノコトの形態に近いようなことをやっていたのでしようが、黒部の辺りは明治のころから出稼ぎが始まるんですね。それで人々の生業の変化に伴い、変わってしまふのです。迎えられるのは、エビス神だけじゃなくて、エビスと大黒二神になっています。

ここでは二神、そして二膳を供することが重要なのです。アエノコトも二神、二膳だったでしょう。ここにエビス祭り、エビス講とアエノコトの共通性があり、類似の祭りと推測することができるのです。

このエビス祭りでは、家の主人がまだ明るいうちに、提灯を持って鉄道の駅に迎えに行くんです。ですからこの日は、提灯を下げて

エビス・大黒様を迎えに来る主人が駅にいる。何事かと、結構、驚きますよ。

黒部のエビス祭りはアエノコト同様に奇祭といってよいものですが、黒部ほど丁寧ではありませんが、全国各地の農家でエビス講という形で行なわれてきました。

エビス・大黒の祭りは関西に始まるもので、兵庫県西宮の西宮神社に由来します。この神社は商人に信仰され、エビス講は商人の祭礼として広がりました。

近世になると商品流通が盛んになり、商人が農村へ品物売り込む、あるいは買い上げる、という行為が展開されるようになります。この経済活動との関連で、エビス信仰、エビス講が農村部に広がったのです。

結局、田の神よりエビス・大黒のほうが有り難いということ、変わっていった。商人資本の力というの、一般農民には強力なものとして映ったのでしよう。それで経済力を持つ商人連中がやって

いるお祭りということで、農民たちがエビス祭り、エビス講を取り入れたのです。江戸の大店の商人も大々的にやっています。

エビス講は、大分新しい祭りですね。江戸時代はおろか、僕は案外、明治になってから始まっているところがあるのではないかと思

っています。僕の住むこの辺り（埼玉県）でもやっていますよ。僕の生家でもやっていますよ。たいいていの家には古ぼけた黒っぽい木でできたエビス・大黒二体があつて、対になっている。それを並べまして、必ず供えるものに尾頭付きの魚がありました。

家の祭り

繰り返しますが、元来、お祭りは「あることを祈願する」、次いで「それが成就したらお礼をする」ということなんです。これは我々の社会でも立派に生きています。

今でもよくあるわけです。例えば受験のときに絵馬を買って納めるなんてね、まさにそれだと思いませんか。そして当然のことですが、人々の最重要関心事項は生業絡みということになりますから、歴史

社会において農業経営の単位であった家族、家庭により行なわれる祭りがクローズアップされることになります。

ちょっと変わった祭りとして群馬の北の山の中、高山村という所で行なわれているものに、小池祭りというのがあります。そこでは11月の寒い時期の未明に集まって、お祭りをしているんです。オテノコボリといひまして、手の上に赤飯を載せて皆で食べながらお祭り

をする。小池一族を構成する家々がそれぞれ神様が宿る小屋というか、小さな神殿をつくって、お供えをします。この神殿には入り口が二つついています。従って二柱の神様を迎えているのですね。これは外でお祭りをしているんです。小池一族の祭りにして、家々の祭りであることがわかります。

これなんかエビス・大黒の祭りの原型で、遡ればアエノコトにも共通するといつてよく、家の祭りなんです。

稲作というのは生産性が高いですから、経営を維持することを家単位でできる。これは日本文化を規定する、非常に重要な条件じゃないでしょうか。個人という単位では無理ですが、家という単位でなら何とかやっていけるのです。

中国では家を越えた組織として宗族があり、中近東あたりですと、何かという部族などという組織が出てきました。人々はそれとの関連で保護、また統制されてきているんですが、日本にはそのような存在はありません。家族でやっていけるといふことから、突き詰めて言いますと、元来、日本の社会の構成単位は、まずは家族で、

共同体というようものはなかつたときと、村共同体としての性格を有する郷村制が展開するよ

うになります。古代においては、そのようなものはありません。僕は一貫して、日本の祭りには、家という単位でやる流れがある、と言ってきましたが、それとは別に、ある時期以降、集団でやる祭りが出てきます。郷村制などの展開と関連するわけですが、現代の祭りには、多分にその集団的な性格を継承しているところがあると思います。ただ僕は古代史家ですから古いほうに関心があるので、古いほうを見ると集団でやる要素は少ないのです。

目に見え感じられる風と水

朝廷にとって三つの祭、11月の新嘗祭と6月、12月の月次祭に準ずる重要な祭りとして、風の神を祀る祭りと水に関係する祭りがあります。風神を祀る龍田神社、水絡みの廣瀬神社の祭りです。4月と7月に執行される両神社の祭りには、朝廷から勅使が遣わされて事に当たることになっています。

風神祭りが行なわれる龍田神社（奈良県生駒郡斑鳩町）は、JR関西線が通っている峡谷の入り口に鎮座し、大阪平野から奈良盆地へ風が入る通路に沿っています。龍田神社のそばには『古今集』に「唐くれないに水くくるとは」と詠われた龍田川が流れていますが、



上2枚：輪島市かやぶきの郷コミュニティ施設、茅葺庵〈三井の里〉で行なわれたアエノコト。報道陣の多さに、田の神様もビックリされたことだろう。座敷に用意された座布団が、こちらでは1組。床の間の右に仏壇、左に神棚が見える。下：時国家のアエノコト。



大和川と合流する地点から少し上流に上がると、佐保川、初瀬川、富雄川をはじめとする奈良盆地を流れる川の水が一所に会して、大和川に合流する廣瀬の河合という地点があり、そこに廣瀬神社が鎮座しています。言うまでもないことですが、大和川は先の峡谷を流れて大阪平野に出、大阪湾に流れ込んでいます。風神祭では、悪風が吹かず稔の豊かなることを、廣瀬の祭りでは山から流れ出す谷川の水が甘水（よき水）となり、稲を育て豊作になることを祈願しています。風も水も目に見え感じられませんから、古代人はそこに神霊を見出し、祭礼を行なっているのです。

群馬県には榛名山、また長野県との境には浅間山のような、歴史時代に入って噴火している火山があるために、噴火のときの火山灰が村や耕地を埋め、当時の在り方をそのまま残しているような所があります。水田や畑の跡といった、古代社会にかかわる考古学的遺構です。火山噴火で埋まった遺跡には、イタリア・ベスピオ火山によるポンペイが有名ですが、群馬には、日本のポンペイといわれるような遺跡があるんですよ。

よく使った祭祀用具で、そこで神祭りが行なわれていたことがわかるんですね。水田の場合ですと、取水口と思しき地点であることが多く、農民が自分の水田に良き灌漑用水が滞りなく入ってくることを願い、祭ったような様子を読み取れるんです。今でも農民が、水田耕作開始時に取水口で神祭りをすることがあり、それを水口祭りなどといいます。古の人々もそれをやっていたらしい。この祭礼は、朝廷の場合でいえば、廣瀬神社の祭りに通じる性格のものであったと見ることができそうです。土師器や滑石製の模造品は、古代人が

なり、風雨が穏やかに推移し良き収穫が得られることを祈願して祭りをしていく。こうなると、朝廷の龍田神社の祭りに通うものを確認可能ですね。これらから、古代人は自分の耕地での稔がうまくいくように、というところで祭祀を行なっていたことが推知されます。耕地の隅で行なわれるこうした祭りも、先に述べた家の祭りの流れの中で把握することができるとは思います。

稲作に関しては、田の神が稲、穀物そのものであるのに対し、用水、風雨となると、稲の外部の存在となり、いわば環境絡みの要素となります。古代農民は、環境の神霊をも齎（もたら）し、祭ることをしていたわけですね。結局、古代人は、まずは目に見える、感じることでできる物を信頼し、そこに神霊を見る。それをお願いし、首尾よくいけば報賽、お礼をする。こうして具体的な場面場面面に即し、祭りが生み出されたのだと思います。アエノコトはこの流れの中で解り得るものであり、日本人の主食である稲作にかかわるだけに、それを典型的に示していると解されるのです。

